

第5節「カフェからまちを変える」

佐藤史織

私は、都市再生や地域活性化に興味を持ち、内閣府都市再生本部が行う「都市再生プロジェクト（第四次決定）」に選ばれた¹、広島県広島市を調査対象とした。広島県広島市は「水の都ひろしま」づくりの推進として、水辺のオープンカフェを行っている。²近年、カフェの経営は地域活性化の取り組みを行う方法として注目されている。ではなぜカフェなのか。カフェが地域活性化を達成すること果たして可能なのか検証していく。そこで、様々な人々が主体となってカフェを行っていることから、広島市の比較として身近な栃木県のカフェを2つ例にあげたいと思う。

調査する上で、地域活性化とは「ある地域で消費活動が盛んに行われており、そこに住む人々が生き生きとした生活を送ることができている状態」と定義づける。地域とは市やカフェを行う周辺のことを意味する。

まず、広島県広島市の概要について確認していく。人口は118万人(2014年4月1日現在)となっており、政令指定都市に指定されている。面積は905km²、広島県全体の約10%の面積を有する³。抑えておきたい歴史として、広島市は世界でも数少ない被爆地だと言うことである。しかし、地道な努力のおかげで、今では再生されたきれいな町並みを見ることができる。きれいなまちづくりのために取り組みとしてごみ処理についての活動も行われている。⁴また、世界遺産に指定されている原爆ドームや厳島神社があり、観光地としても有名である。また、太田川の最下流部が6本の川に分かれたデルタ地帯に、中国地方の政治・経済の中核機能が集積する都市である。

➤ 広島県広島市 —行政×市民×企業—

広島市は平成14年に、都市再生プロジェクトに選定された。このプロジェクトの実行にあたり、広島市は市民と行政の協働による「水の都ひろしま」の実現を目指している。河川空間の利活用を行うことで、まちづくりとの一体化を測っている。水辺の利活用の取り組みを推進するために管理をする行政だけではなく、運営主体である市民や企業等の協力が必須である。そこで、「水の都ひろしま」づくりの推進母体となる「水の都ひろしま推進委員会」（以下、推進委員会）が設置された。推進委員会は市民、経済・観光関係者、学識経験者、行政（国・県・市）で構成される。「水の都ひろしま推進計画」では、京橋川地区及び旧太田川（本川）・元安川地区では、「水辺オープンカフェの実施」を重点事業として位置付けた。⁵今

¹ 首相官邸「内閣府官房地域活性化統合事務局 内閣府地域活性化推進室」

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/toshisaisei/03project/index.html>

² 広島市 HP 『「水の都ひろしま」構想』

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/genre/000000000000/1001000002448/index.html>

³ 広島市 HP 「広島市の統計」

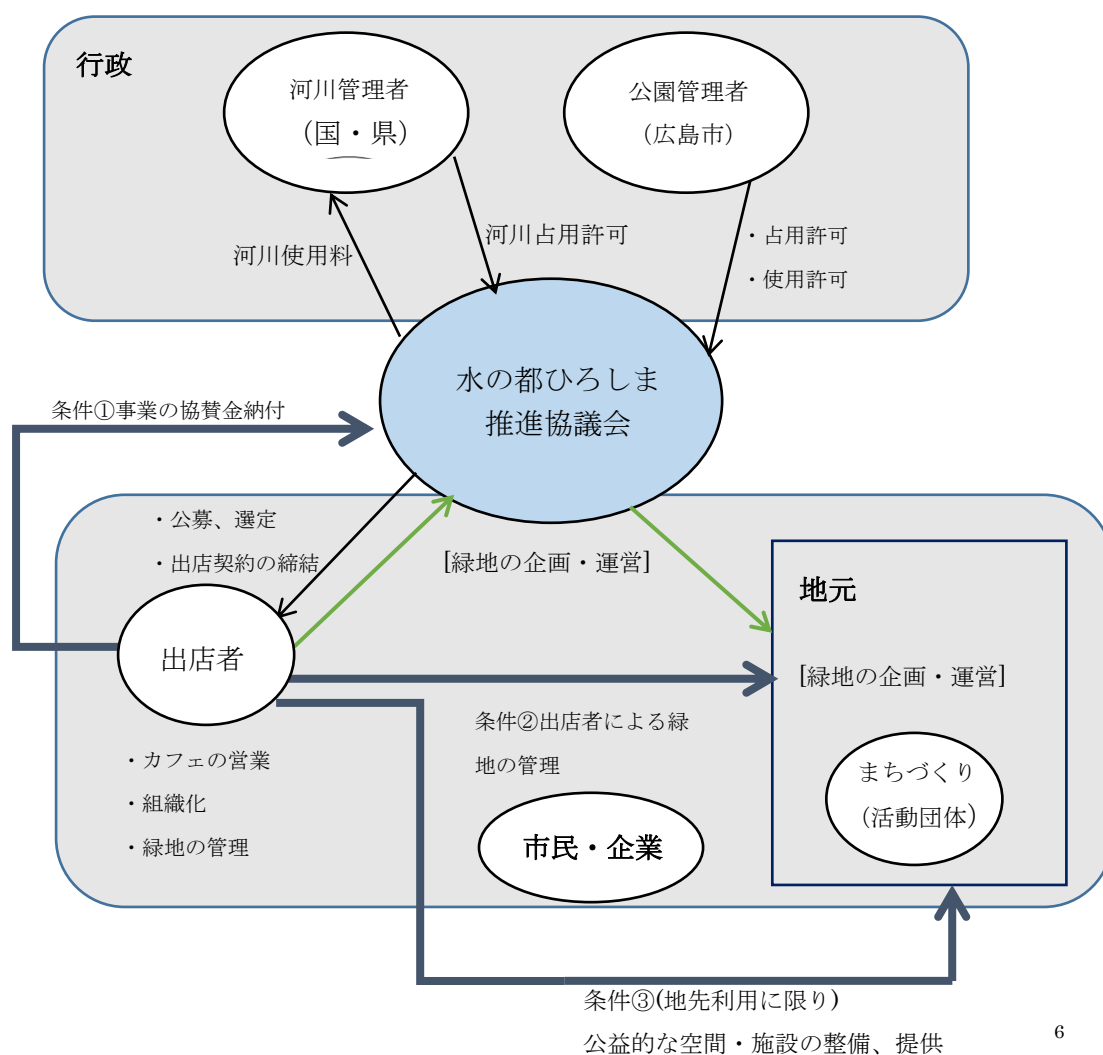
<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/genre/000000000000/1001000001492/>

⁴ 広島市 HP 「ごみ・環境」

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/genre/000000000000/1001000000288/>

⁵ 水の都ひろしま推進協議会「水辺のオープンカフェ」より

回、その「水辺のオープンカフェ」事業に焦点を当てて調査を行った。すでに水辺のオープンカフェの取り組みは広がりをもたらし、都市再生プロジェクトとは少し独立していた。山口県出身の先輩の帰省の機会に広島市役所の観光課の方にお話を伺い、パンフレットなど参考となる資料をもらってくださった。推進協議会の中に設置した「オープンカフェ通り専門部会」や「事務局会議」、「出店者選定委員会」で具体的な検討を行う。また、事業の枠組みは図のようになっている。実行していく上でのポイントは①民間資金による公共空間整備の実現②出店者の社会的活動により、地域との関わりをつくる③民間施設の公益的な活用を導く、の3つである。



カフェの利用には、2種類存在する。1つ目は、地先利用型で、隣接民有地の店舗が河岸緑地の一体を空間利用するというやり方である。京橋川右岸地区では

6 水の都ひろしま推進協議会『水辺のオープンカフェ「水辺のオープンカフェの仕組み」』より

ほとんどがこの形態をとっている。2つ目は、独立店舗型で、河岸緑地に店舗そのものを設置するやり方である。⁷旧太田川（本川）・元安川地区における1店舗はこの形態をとっている。ここで、京橋川オープンカフェと元安川オープンカフェの違いをみしてみる。京橋川オープンカフェは地先利用型のカフェが多く、元安川オープンカフェに比べて出店数も多い。また、出店者会が結成され、イベントの開催、地域との協働活動等に努め、周辺緑地の清掃活動が義務化されている。元安川オープンカフェは平和記念公園が近くにあり、事業コンセプトの中にも「平和記念公園の来訪者のために憩いの場、交流の場をつくる」ということが盛り込まれている。店舗が離れており、屋台というイメージが全くなく、「もてなし」の空間が演出されているのも特徴である。⁸

水辺のオープンカフェの結果として、①新たなにぎわい空間の創出②新たな都市の楽しみ方の創出③新たな観光スポットとして定着④環境改善があげられる。マスコミにとりあげられることで河岸緑地の利用が大幅に上昇した。また、京橋オープンカフェの利用者へのアンケートで、利用した感想として「とてもよい」と「よい」を合わせると、87%にもものぼる。⁹以前は、河岸緑地での不法駐車・駐輪が目立っていたが、オープンカフェの出展に伴って大幅に減少した。オープンカフェの出店によりほかにも、店舗の証明があることで夜間の歩行者の安全が守られたり、清掃活動が義務付けられることで河岸緑地の景観が保たれたりという良い効果が見られる。このオープンカフェは市民・観光客のどちらもが利用していることから、消費活動が盛んに行われているのではないかと考える。また、市民の参加により市民の生活の一部になっていることが伺える。これらのことから、広島市の水辺のオープンカフェは地域活性化の一助になったことがわかる。

➤ 栃木県宇都宮市 ―学生×市民×行政―

私たちが通っている宇都宮大学には、教育学部人間形成過程という教員免許を取ることを目指さず、学生の主体性を養うことを目指している学科がある。総合人間形成過程の授業の中にプロジェクト研究というものがあり、学生が主体的に社会の現場に出て、企画・実行をするものがある。その中で、ある学生たちが2011年～2013年まで経営していたカフェがある。「café KANMAS（カンマス）」（以下、KANMAS）というカフェである。そのカフェの代表を勤めた学生に話を聞き、学生のまちづくり、地域への参画について伺った。なぜ、わたしがこのカフェを水辺のオープンカフェと比較しようと考えたかという、以前このカフェのファンであり、よく通っていたため、一番身近なカフェだからである。このカフェは宇都宮市が行う「中心市街地商店街の空き店舗活用事業」によって宇都宮市のユニオン通り商店街（以下、オリオン通り）にオープンした。その中の「宇都宮市学生による空き店舗活用事業」に先ほど述べた、プロジェクト研究の授業

⁷ 水の都ひろしま推進協議会「水辺のオープンカフェ」より

⁸ 水辺のオープンカフェ Map より

⁹ 水の都ひろしま推進協議会『水辺のオープンカフェ「水辺のオープンカフェの効果と課題」』

チームで提案をし、市から補助金をもらい、空き家を利用してまちの活性化に取り組んだ。KANMAS という名前の由来は、代表である大嶋さん（現宇都宮大学教育学部大学院2年）の地元の栃木県大田原市では、かき混ぜることを「かんます」と言い、地域をかき混ぜ・かき回すようなお店にできるように、という意味も込めて名付けたという。何か居場所になれるような、(まちの) 縁側みたいになることを目指した。基本的に地域活性化するということは、その地域に愛着を持ち、活性化をしたいという熱い想いを持って行うものである。しかし、学生たちの出身地はさまざま、宇都宮のオリオン通りに愛着を持った学生は一人もいないというところからのスタートであった。そこから学生間でコミュニティーの創出、イベントづくりなどから地域活性化を行おうということになった。彼らが、オリオン通りで営業を始めた当初はよそ者扱いだったという。なぜかという、学生・行政と元々オリオン通りでお店をやっている人の間で考え方の違いが生じていたためである。学生・行政は当然、オリオン通りの活性化を目標としているが、オリオン通りの人々はそうでないという人も少なくない。自分の代でお店を閉める予定の人もいて、よそ者が身勝手に行う活性化事業には興味がない人もいるのだ。大嶋さんが語るには、学生への対応が隣のオリオン通り商店街とは全く違う雰囲気ユニオン通りにはあったという。確かにオリオン通りは華やかな雰囲気があり、ユニオン通りは落ち着いたというべきなのかひっそりとした雰囲気がある。そのような状況でも、オリオン通りの人々と関わりをもとうとした。しかし、情報発信が難しく、どう近づいて行けばいいかわからなかったという。ここから状況をかえるきっかけとなったのが、9ヶ月目にして近隣のお店の方とイベントを協働で行ったことである。そこからオリオン通りの新年会や忘年会、お祭りにも参加するようになった。

大学生ならでわの問題として、常にお店にすることができないという問題があり、当初は週3回（火・水・木曜日）しか営業できなかったが、2012年からは常勤員を雇い、週末の営業も円滑に行えるようになった。大嶋さんにインタビューをした際に、「まちの活性化ができていたと感じたことはありましたか？」と伺うと、「イベントをやったときにユニオン通りが少し盛り上がるということはあるけど、それは一過性のものでなかなかまちの活性化とまではいかなかった。」と答えて下さった。確かに、広島市の例のように大掛かりな事業ではなく、ユニオン通りという中心市街地ではあるが、高齢化も進み、店舗の移り変わりもある場所の一角のカフェがまちを変えるというのは難しいと感じた。しかし、活性化のきっかけになるのではないかと実感したイベントもあったという。その実感はまちのニーズにあったものをKANMASから発信できたという確証が持てたという。それはKANMASの前で野菜の直売所を行ったときだという。KANMASのイベントで知り合った「いい里さかがわ館」¹⁰という野菜の直売所の方が、ここで新鮮な野菜を売らせてくれないか、ということで行ったものだという。どのようなことがユニオン通りの活性化に繋がるかを考え、イベントを数多く企画し、イベ

10 「いい里さかがわ館」HP：<http://sakagawakan.com/>

第1章—第5節

ントで知り合った方とまた協働してイベントを行うということが何度かあったそうだが、そのときに宇都宮を盛り上げたいという熱い想いを強く感じたという。はじめはユニオン通りに全くなかった愛着も3年目には湧き、結果として地域の活性化はできなかったというが、このような経験はなかなか得られない経験であろう。

広島県広島市の水辺のオープンカフェと栃木県宇都宮市のcafé KANMASという異なる主体によって行われたカフェによる地域活性化事業を比較した。この調査をするにあたって感じたことは、広島市という遠い存在が少し身近に感じられたし、逆に身近だったKANMASの存在を客観的に見ることができた。結論としてカフェは、まちの活性化ができるという可能性をもったものだという事だ。